No. 987

総選挙特集

—福田派後退—

庄内平野の真中を宣伝カーが疾走する。近藤鉄雄（三木派）、木村武雄（田中派）、黒金泰美（大平派）、鹿野彦吉（福田派）、自民党前議員4人で4つの議席を争う山形一区は典型的な派閥選挙区である。これに加えて、社会党が〝安全〟を期して候補者を一人にしぼったため、自民党内部は他党候補より仲間を倒せと必死の戦いぶり。

3カ月前の補欠選挙で当選したばかりの近藤候補は

〝これからの政治は若い人でないとだめだ。若さのコンテツをよろしく〟と握手ぜめ。

放言元帥、木村大臣は

〝田中内閣は私が作った。これからの田中内閣にとっても、私はなくてはならない存在〟と田中ブームに便乗。

やや立遅れの鹿野候補は

〝唯一の山形市出身の鹿野をよろしく〟ともっぱら宣伝カーを使っての連呼戦術。

補選で返り咲いた黒金候補は、

〝足を使うより方法はない。今回も足、足、足〟と全区をくまなく回った。

12月10日、県民が見まもる中、開票速報が次から次へと入ってくる。

午後9時30分、〝放言もなんのその〟と木村大臣早々と当確。

続いて若さを売った近藤氏。全区から平均して票を得た黒金氏も最下位ながらゴールへ。

〝貧乏くじ〟をひいたのが鹿野候補。激烈な派閥選挙の中で、福田派は山形一区でも破れ大きく後退した。

—共産党躍進—

〝田中ブームに乗って票かせぎ〟の自民党も派閥選挙に終始して、現状維持がやっと。都市部では振れば、大きく後退し保守系無所属の当選議員を加えても、前回を下回った。

〝政治の流れを変えよう〟と野党第一党の社会党なんとしても3桁の議席を確保したいと、前回共倒れの地区では、候補者をしぼるなどして、118人と、議席の回復に成功。成田委員長の顔は、うれしさでゆるみっぱなし。昨年の参院選に続いて低落ムードに歯止めをかけ、失地回復への足がかりをつかんだ。

〝D51の力強さ〟をキャッチフレーズに選挙戦を闘かった公明党。政教分離後初の選挙は、47議席から26議席に激減。これまで横ばいをつづけてきた民社党も、前西村委員長の地盤大阪で完敗するなど、20議席をついに割ってしまった。公民共闘も実らず結党以来の危機に見まわれ、がっくり肩を落とす春日委員長。そんな中で地道に地方議会などで地盤を築いてきた共産党は、大都市東京・大阪・京都で全区に議席を確保するなど、めざましい躍進を見せ、一挙に、第三党へとのしあがった。

〝これまでなれあいで運営されてきた国会を民主的に運営し、議案提案権を手に入れたので、今国会にザル法の公害法の改正など、どんどん国民の生活を守るための議案を提案したい〟と野坂議長。長期保守政権を維持する自民党と対決姿勢を鮮明に打ちだした社会・共産両党に期待する国民の声を反映した第33回衆議院総選挙。

新しい政治の流れが生れるかどうか。